

『法華經』流通分の研究（要約）

白 景皓

従来の「大小各別」の思想、すなわち、大乘（菩薩乗）と小乗（声聞乗、独覚乗）との対立を超越した「一乗」の教えを説く『法華經』（*Saddharmapundarikasūtra*）は、大乘經典中、最も広く知られ、各地域と時代の文化に多大なる影響を与えてきた。

『法華經』の成立は三期に区分できる。第一期（第二品から第九品）は『法華經』正宗分とされ、一乗思想を中核とする原初部である。第二期（第一品及び第十品から第二十品）においては、序論としての第一品が補足されている。それを除いた第十品から第二十品は一乗思想を広めるための流通分である。第三期（第二十一品から第二十七品）は後代に編入された部分であり、独立した形を有する。

『法華經』に対しては、H. Kern 博士による英訳を皮切りに、多様な視点から種々の研究業績が積み上げられてきている。しかし、鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』だけに由来する諸主張（例えば、一念の心に三千の諸法を具えることを観ずる「一念三千」の修行法、無量の諸仏を化仏とする「本仏論」など）や『法華經』より後代の經論（例えば、瑜伽行中観派を始めとする中後期大乘仏教の經論）に基づいて、『法華經』の文脈から大きく外れた思想をあたかも『法華經』本来の思想であるかのように提示する研究が予想以上に多い。加えて、『法華經』流通分の構造がいかなるものかを闡明しようとする研究はこれまでのところ量的にも質的にも全く不十分である。本論文は、流通の手段、流通の対象、流通の主体という三つの視点から上記の問題を考察しようとするものである。

本論文は序論、本論と附論より構成される。本論は全3章及び結論から、附論は翻訳研究からなる。

序論では、『法華經』の構成、題目、成立史、作者、注釈書類に関して概観しながら、竺法護訳『正法華經』に対する研究史の考察、漢訳『法華經』の流通状況の概論、『法華經』流通分を中心に扱った先行研究の概説、研究の目的と方法及び論文構成の提示を行った。

本論第1章「流通の手段」の第1節「〈薬王如来譚〉と『法華經』「法師品」」では、『法華經』「法師品」の思想に対する『正法華經』〈薬王如来譚〉の存在意義を検討している。第一の意味の「法供養」（諸經典の説示、正しい説き明かし、受持、考察及び正法の理解）の思想を説く〈薬王如来譚〉は、対告衆の点で『法華經』正宗分と現行「法師品」と繋がり、「法師品」が説く經典流通の思想と連結している。第2節「提婆達多品」の成立論では、「見宝塔品第十一」の後分に増補された「提婆達多品」の成立について考察している。「提婆達多品」は後の時代に「(元) 見宝塔品」と「勸持品」との間に編入されている。また、「提婆達多品」は流通の手段のうち、聴聞、説示、尊

崇の三つに焦点を当て、それぞれの功德の結果として国王、提婆達多、龍女の成仏を示すものであると考えられる。「提婆達多品」の編入者達は、『法華経』流通分の思想に合わせて「提婆達多品」を編纂したと指摘することができる。第3節「供養と受持」では、流通の手段のうち、「供養」及び「受持」の実態を明らかにしている。まず、『法華経』流通分の「供養」の思想を明示している。『法華経』流通分は「法供養」と「財供養」の両方を重要視している。両者を説くことによって、『法華経』の流通を拡大させることができる。次に、『法華経』流通分の「受持」の概念を究明している。『法華経』の受持は、法華経巻を保持し、『法華経』の字句と内容を記憶することである。『法華経』の受持は、『法華経』の口承実現の必須条件である。それは、衆生達を速やかに成仏させるものであり、また「法供養」の実践の前提となるものでもある。

第2章「流通の対象」の第1節「三乗方便」では、「三乗方便」の内実を明らかにしている。『法華経』成立前の「小乗を劣等なるものと見なし、大乘こそ尊ばれるべきものである」という「大小各別」の思想に対抗する形で、三乗の教えは如来が説く巧みな方便として価値を持つものであり、一乗へ導く前段階にあるものであるという「三乗方便」の思想が提示されている。第2節「一乗真実」では、「一乗真実」の思想について考察している。一乗の教えは、三乗それぞれの教えの対立を無化するものとして、三乗の修行者達を仏智に至らすための唯一の手段である。第3節「法華経巻」では、法華経巻の存在価値を分析している。初期仏教から大乘仏教までには、遺骨供養に加えて経巻供養、法供養への歴史的展開がある。『法華経』流通分の作者達は、一乗の教えの媒体である法華経巻を「如来の一塊の遺身（如来全身）」と表現することによって、衆生達が法華経巻供養に励むことを促している。それにより、『法華経』の効果的な流通をはかっていると考えられる。

第3章「流通の主体」の第1節「願生の法師」では、『法華経』流通分における願生の法師の活動と性格について分析している。願生の法師は、「全ての衆生達を成仏させる」という誓願によって人間に生まれ、三乗及び一乗の教えを説く『法華経』を衆生達に流通させる。新興の大乘仏教が伝統の部派教団と協和しない状況のもとで、願生の法師は、あらゆる衆生達及び教法に対する平等の心を持ち、「大小各別」の教条を取らず、仏教の統一を目指そうとする人物として現れている。第2節「〈高原鑿水喩〉と速疾成仏の思想」では、〈高原鑿水喩〉の構造とそこから理解される「速疾成仏」の思想について考究している。「速疾成仏」の思想は、菩薩は『法華経』成立前の般若經典類などの大乘仏典を聴聞して、空性思想に通達した後、一乗の教えを説く『法華経』を聴聞、受持、そして空性思想と『法華経』の一乗思想を説示すると、速やかに成仏することができるという教えである。第3節「『法華経』流通による成仏の思想の例証」では、国王、提婆達多及び龍女それぞれの成仏の物語について考察している。国王、提婆達多及び龍女の成仏の物語は、『法華経』の聴聞、説示及び尊崇といった流

通の手段により、衆生達が成仏できるという功德利益を示している。

以上の考察を踏まえて、結論では以下のことを指摘している。『法華経』流通分の作者達は、一切衆生が成仏できるという一乗思想を核とし、衆生達に速やかな成仏の功德利益をもたらすものとして流通分を編纂したのである。

附論では、『法華経』「方便品」(70 頌以前)、「法師品」、「提婆達多品」、「勸持品」(2 頌以前) 及び竺法護訳『正法華経』「善権品第二」〈会三歸一偈〉、「藥王如来品第十」〈藥王如来譚〉、「七宝塔品第十一」〈龍女の成仏〉に対する詳細な訳注研究を提示している。